

インドネシア同窓会「心を一つに」 さくらサイエンスメンバール ジヨグジャカルタに集結

科学技術振興機構(JST)国際青少年サイエンス交流事業「さくらサイエンスプログラム(SSP)」の参加者による第6回さくらサイエンスクラブインドネシア同窓会が12月13日、インドネシアのジヨグジャカルタで開催された。テーマは、「絆を再び結び、協働を広げる…未来のイノベーションに向けたインドネシア・日本同窓生ネットワークの強化」とし、同窓生ら90名の参加があった。

同会は、インドネシア同窓会バイツ幹事長のあいさつで始まった。バイツ幹事長は「本同窓会は、研究者・教育者・イノベーター・起業家・学生など多様な同窓生が再集結し、さくらサイエンスに由来するネットワークを強化することが目的である」と語り、日本・インドネシアの協力的体制の深化を、学術交流だけでなく、イノベーション、研究、コミュニティ形成へ広げたい意向を示した。新たな友情・アイデア・協働が生まれる場となることを願い、開会の言葉とした。

JSTさくらサイエンスプログラム推進本部の庄司室長は、あいさつの中で、「同窓生が日本とインドネシアを繋ぐ架け橋となることを期待している」と語り、これまでのインドネシア同窓会の各種ワークショップ実施等の自主活動への謝辞を示した。

在インドネシア日本国大使館の明珍充臨時代理大使は、ビデオメッセージを寄せ、「科学技術の強化や高度人材の発展は、イノベーション、長期的な経済成長、人々のウェルビーイングに不可欠である」と語った。また、「SSPが科学技術分野における人材育成に貢献する重要なプログラム」とし、「同窓生には日本で得た経験を生かし、両国のさらなる関係強化に生かしてほしい」と言葉をつなげた。

■ 情報セッション

JSTの実施する新スキームとして、日ASEAN科学技術・イノベーション協働連携事業(NEXUS)の概要を説明。国際共同

研究をJSTの吉岡専任コーディネーター、若手人材交流(Yitec)をJSTの石黒シニアエキスパートが説明した。日本留学に関して、日本学生支援機構インドネシアのプラビンダ・マルティエイ・サリ氏より、バハサ語で情報提供があった。

また、さくらサイエンスプログラム修了者を対象としたニトリ奨学金の新設について、JSTの単調査役より説明があった。

■ シェアリングセッション

2名の講演者が登壇した。一人目はYitecを活用した具体的な交流事例として、ガジャマダ大学のイクティ・アシツ・プルウエストリ教授から、自身のネットワーキングの歩みの紹介、Yitecを通じた奈良先端科学技術大学院大学との交流、今後に向けた継続的な交流、共同研究への発展のビジョンの共有があった。二人目はさくらサイエンスプログラムの同窓会組織「さくらサイエンスクラブ(SSC)」メンバーを代表して、国立研究イノベーション庁のコレビ・サブリナ氏が登壇。SSPでの経験が、その後のeIASIAプログラムへの参加など自身のキャリア形成にどのように生かされてきたかや、現在の活動状況などについて共有があった。



同窓会幹事によるいくつかのアイスブレイクののちに行ったジェスチャーゲームでは、正解が出るまで観客からの声援が続くなど、かなりの盛り上がりを見せ、同窓生同士が垣根無くつながれる雰囲気醸成され、ネットワーキングが促進された。参加者の多くは、学生が中心となっており、自由時間に日本留学に関して積極的な情報を得ようとする姿も多く見受けられた。

インドネシア同窓会は閉会の言葉ののち、「さくらサイエンス、We are One!」を唱和し、盛会のうちに終了となった。



さくらサイエンス、We are One! 全員で記念撮影



SSCメンバーを代表して登壇したコレビ・サブリナ氏



JST石黒氏によるNEXUS若手人材交流の説明